詩編 14 編の黙想：主は、貧しい者の避けるどころ、従う人々の群れの中にいます

主は彼らの「避けどころ」(6 節 mahsêhū their refuge）は、新共同訳では、2：12（hōwsê 寄り頼む)，5：12（kassinhā 盾)、7：2（hāsîtî、寄り頼む、）11：1（hāsîtî、寄り頼む）と登場します。こう考えると新共同訳の訳者自身が「避けどころ」というイメージを好んでいることがわかります。これは翻訳者としては少し困りますが、「主を信頼する」は「主を避けどころとする」ことであり、「主を避けどころとすること」は「主に信頼すること」であるという連想が浮かびます。あなたが誰に信頼し、だれを避けどころとしていますか？詩編 14 編をまず自分で朗読してみましょう。

・神の存在を否定する者　この個所はパウロによってローマ 3：10－12 に引用されています。「神が存在するかどうか」という問い、「神などない」という言明は人間がものを考える地平を超えています。ただ、「神を知らぬ者」「愚かな者」（ナーバル）だけが心の中で、「神は存在しない」とつぶやくのみです。たとえ大勢の人が神はいないと考えるとしても、神の存在は人間にとって前提であり、人間は、存在しないものをそもそも考えることができないのだと言われます。天才的科学者にして熱心なキリスト者であるパスカルは、神が存在しているとして生きることの方が遙かにカケに勝てる素晴らしい生き方であるといいます。(『パンセ』）AI もそう答えるはずです！
・善を行う者はいない　では、なぜ、「神は存在しない」というような人間がいるのでしょう？それは彼ら彼女らが「忌むべきことを行い」「善を行わない」「腐敗した」人間だからです（1 節)。正しいお方、正しい道から「背き去り」「汚れている」（3 節）からです。人間の比べ合いならまだしも、神が存在すれば、自らの悪が問われるからです。神を問う問いはそれゆえ認識哲学の問いではなく、道徳・倫理の問いです。それゆえ、私たちは無駄な「議論」を避けましょう。詩人はあらゆる人に聞き、調査した結果、「善を行う者はいない。ひとりもいない」と言っているのではないのでしょう。人は神ではない以上、その人の善と悪の程度は「五〇歩百歩」であり、私たちは「善を行う者はいない。一人もいない」と信じるのです。これが外面は良い顔をしている人にごまかされず、悪い人を百％断罪しないための自由な生き方に繋がります。これは、自分自身の理解を含めてのことであり、この世界で相対的な善悪の判断をする際にも心に留めておくべきことです。すべては罪びとであるとは何と「愉快な」洞察でしょうか！
・主は見渡し、探される　相対的な善悪、そして、善を行う者はいないことを主なる神は見渡し、探しておられる。「目覚めた人」「神を求める人」「善を行う者」はいない。では、いったい、5 節の「従う人々」「貧しい人」とはどのような人でしょうか？　パウロは、「それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の審きに服し」、(ローマ 3 :19) 神の恵みと赦しに生き、自らを誇ったり、卑下する「不自由」から救われるためであると考えます。「従う人々」「貧しい人」とはそのような人のことです。
・悪を行う者の自覚　詩人は、悪を行う者は自分を知っているはずであるといいます。ものを食うように隣人を食らい、貧しい人々の計画・活動を挫折させても、神は、実は、従う人々とともに、そこにいまし、必ず、彼らの避けどころであること、自分がただ主を呼び求めない者に過ぎないことを。
・帰還の喜び　7 節はバビロン捕囚からの帰還を心に描いているのでしょうか？　主はその民をいつまでも囚われの身に放置することはないでしょう。救いはシオンから起こるというシオン伝承（キリスト到来の希望）はダビデ王家の絶対化を孕む問題をもっていますが、イエス様はダベデを遙かに超えています。ハレルヤ！